

千葉市人形塚古墳のいわゆる地割線について

沼澤 豊

はじめに

千葉東南部ニュータウン報告第35冊として、人形塚古墳を含む椎名崎古墳群B支群の報告書¹⁾が刊行された。多数の埴輪を伴う人形塚古墳をはじめとする十数基の古墳に加え、歴大な旧石器や縄文土器をバランスよく網羅し、綿密周到な編集と事実記載、簡にして要を得た調査の意義づけが配されたきわめて質の高い報告書である。刊行まで20年、直接担当者だけでも延べ30余名にのぼる。センターの総力が結集された記念碑的労作とあって過言ではなからう。

思えば東南部報告第1冊²⁾は筆者が執筆したものであったが、比べ見て汗顔の至りというほかない。この調査は椎名崎古墳群A支群の古墳6基（前方後円墳1を含む）を対象とし、主体部は横穴式石室5、箱式石棺2を発掘した。今の歩掛りなら何月人の力量になるのかわからないが、実質11か月で発掘から整理まで一人で担当した。地形測量にはじまって石室・石棺・遺物出土状況の実測・写真撮影、整理に入ってから熟練の調査補助員は配されず、遺物の実測・撮影、遺構・遺物のトレース、挿図・図版組みまで何から何まで一人でこなし、事実記載の原稿までがやっとなし、新年度になると千葉市東寺山石神遺跡の調査にまわされ、校正さえ見せてもらえなかった。

報告書に書けなかったことのうち、円墳の築造企画に関する着想については、それから25年のあと、本誌第56号³⁾に掲載することができた。それを機に、全国のあらゆる墳形の古墳、さらには横穴式石室の企画性にまで論を及ぼしてきたが、筆者の築造企画論の原点ともなった千葉東南部地区の200基を越す古墳における企画性を検証する、いわば足下を固める作業は等閑に付されたままであった。

そこで、人形塚古墳報告書の刊行を機に、この古墳の企画性と、旧表土面で検出されたいわゆる地割線の意義について検証し、辺境の一古墳が、全国一律の設計原理によって築造されていることを確認することに

よって、筆者の企画論、尺度論の正当性の証しとした。

1. 古墳の概要と地割線

人形塚古墳は前方部を南西面させる前方後円墳で、二重の周溝を伴う。周溝は、前方後円墳に通有の盾形や墳丘相似形の平面プランではなく、例の少ない長方形周溝⁴⁾である。地形の制約から、外溝は右側縁のほぼ全面、左側も後方の隅角が斜面にかかり、予定どおり設定されていない。内溝の左後方の隅角も、斜面を避けたため直角になっていない。また、前方部の左隅角の先に竪穴住居があり、これを避けるかのように、内溝、外溝とも途切れている。墳丘は比較的よく遺存していたが、左側では、くびれ部を中心に後円部から前方部にかけてかなり広い範囲で裾部を削り取られていた。

墳丘規模について、墳長は内溝下端でとらえると42.6m、上端では41.8m、後円部径は下端で27.2m、上端で26.6m、前方部前幅は復元推定28.4mと報告されている。

円筒埴輪のほか、人物、馬、家形などの形象埴輪が出土し、それらは殿塚古墳、姫塚古墳など山武地域の古墳出土品と同工の可能性が高く、殿塚古墳が二重の長方形周溝をもつこととともに、両者の親縁性を示す要素と考えられている（報告書481頁）。

いわゆる地割線（報告書では「墳丘計画線」）は、墳丘封土を除去したところ、黒色の旧表土面に、幅20cmほどの黄褐色土面が帯状に、あるいは小ピットの連続として検出され、存在が明らかになった。深さは1～5cmで、黄褐色土は意図的に充填された可能性も考えられるという（292頁）。この地割線に関しては、本誌第19号に発掘担当の笹生衛氏が調査概要⁵⁾（以下「概要」という）を寄稿し、その意義についても所見を述べている。

後円部では2条の同心円状の地割線が確認され、内

円の直径は14.4m、外円はくびれ部にのみ残された円弧から25.2mと推定された。内外円周の意義について概要と報告書では多少表現が異なるが、内円は墳丘第2段（上段）の基底（裾）を画し、外円は周溝（内溝）の掘りこみ開始線、すなわち内溝の上端線を示すという見解で一致している。

くびれ部から前方部方向には、4本の直線状の地割線が確認された。左からA、B、C、Dと仮に名づけると（第6図）、左内側のB線は、後円部寄りでは墳丘中軸線に平行し、途中から左に開きはじめ、いわゆる撥形のカーブを描く。一方、A線とC線は直線的に延び、部分的にも中軸線と平行することなく、前方に向かって開いている。右側のD線はごく一部しか残らないため、開き方はわからない。4本とも内円の外側を起点とし、内円とは接しない。

概要では、「前方部側面にそって走る直線状の地割線（A、C線か？）は前方部上段墳丘の上端部稜線と一致する」として、「前方部上段墳丘の盛土作業と密接な関係があることは間違いない」と評価する。一方、報告書では、「前方部の墳丘構築に関わると考えられるが、現状の測量図とは合致していない」として、「盛土範囲を画する線とは考えにくい」（294頁）と結論している。

2. 後円部の地割線と当初プラン

筆者はこれまでの研究によって、古墳は主丘部直径の24分の1の長さ（24等分値）を基準単位として設計されていること、つまり半径を12単位にとり、墳丘各段の裾や肩の線の半径を単位数で決定し、前方部長や幅、周溝の幅なども同じ基準単位によって決定していることを明らかにしてきた。

また、古墳の主丘部直径または一辺の長さは、最初古墳である奈良県箸墓古墳の120歩（164.4m）を基準として、古墳尺（1尺22.9cm）の6歩（8.22m）きざみにあらかじめ定められた規格値の序列の中から選択されていること、径30歩（41.1m）以下の中小規格では3歩（4.11m）きざみに微調整されていることを明らかにした⁶⁾。

後円部地割線の外円直径は25.2mと推定されているが、これは径18歩（24.7m）の規格値に近い。外円の地割線はくびれ部に残ったわずかな円弧から推定されているので、若干の誤差はまぬがれ難く、本来は径18歩に設定されていた可能性が高い。

径18歩（1単位は3/4歩、1.03m）の円周図を作成

すると、外円は半径12単位目の円周に一致し、内円は半径7単位目の円周によく一致していることがわかる（第1図）。横穴式石室は半径8単位目と12単位目の円周間におさまっている。

実は筆者が発掘した椎名崎古墳群A支群の2号墳（以下、A-2号墳のようにいう）が同じ径18歩（24.7m）の規格で、横穴式石室は奥壁を中心から8単位目に置き、羨門を12単位目に置くという、人形塚と同じ平面構成をもっていた（第2図）。

両古墳とも石室は脆弱な水成砂岩で造られ、天井石にも同じ石材が使われていた。当然天井石は発掘時までに崩落していたが、その脆弱性ゆえに石室の上に厚く盛土し、盛土の過程で封土を叩き締めるような作業は絶対に避けなければならない。そのため、A-2号墳では、半径8単位目より内側にのみ高く盛土し、外側は低平なテラスとして石室を保護するとともに、天井石崩壊に備えて第2、第3の主体部を追加設置できるよう措置されていたものと推察した（注3文献）。

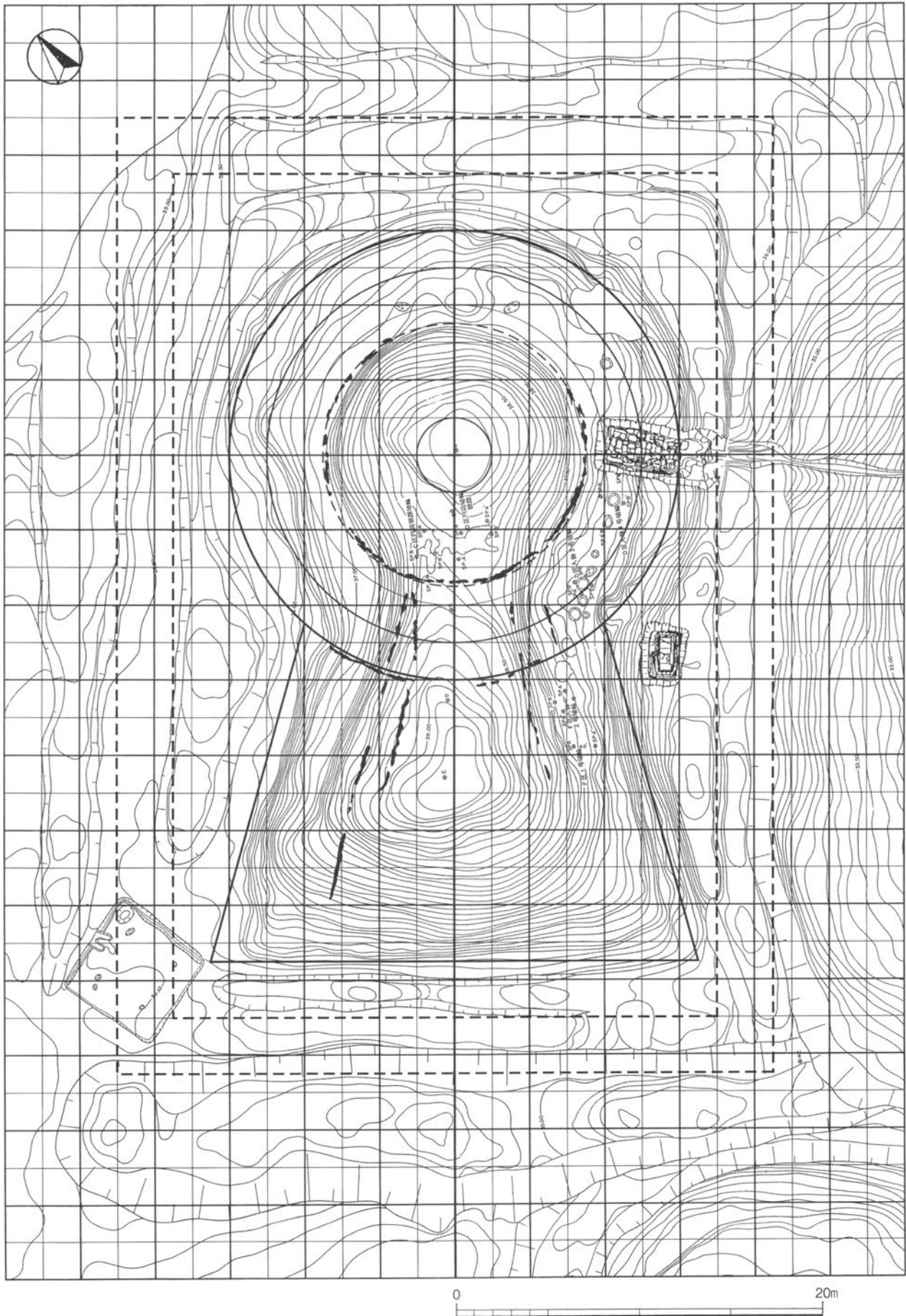
この想定を基本的に修正する必要を感じないが、墳丘裾を中心から8単位目と考えた点は、人形塚の例から推して7単位目とした方が妥当で、訂正したい。8単位目が墳裾とすると、墳丘構築後に追加されたとみられる箱式石棺を設置するためには、墳裾をかなり削り取らなければならない。墳裾が7単位目であれば、裾線ぎりぎりになるので、墳丘をほとんど損壊しないで設置されたことになる。

椎名崎A-3号墳も同じ径18歩（24.7m）の墳丘規格で、横穴式石室の設置にも同じ企画性が認められる（第3図）。

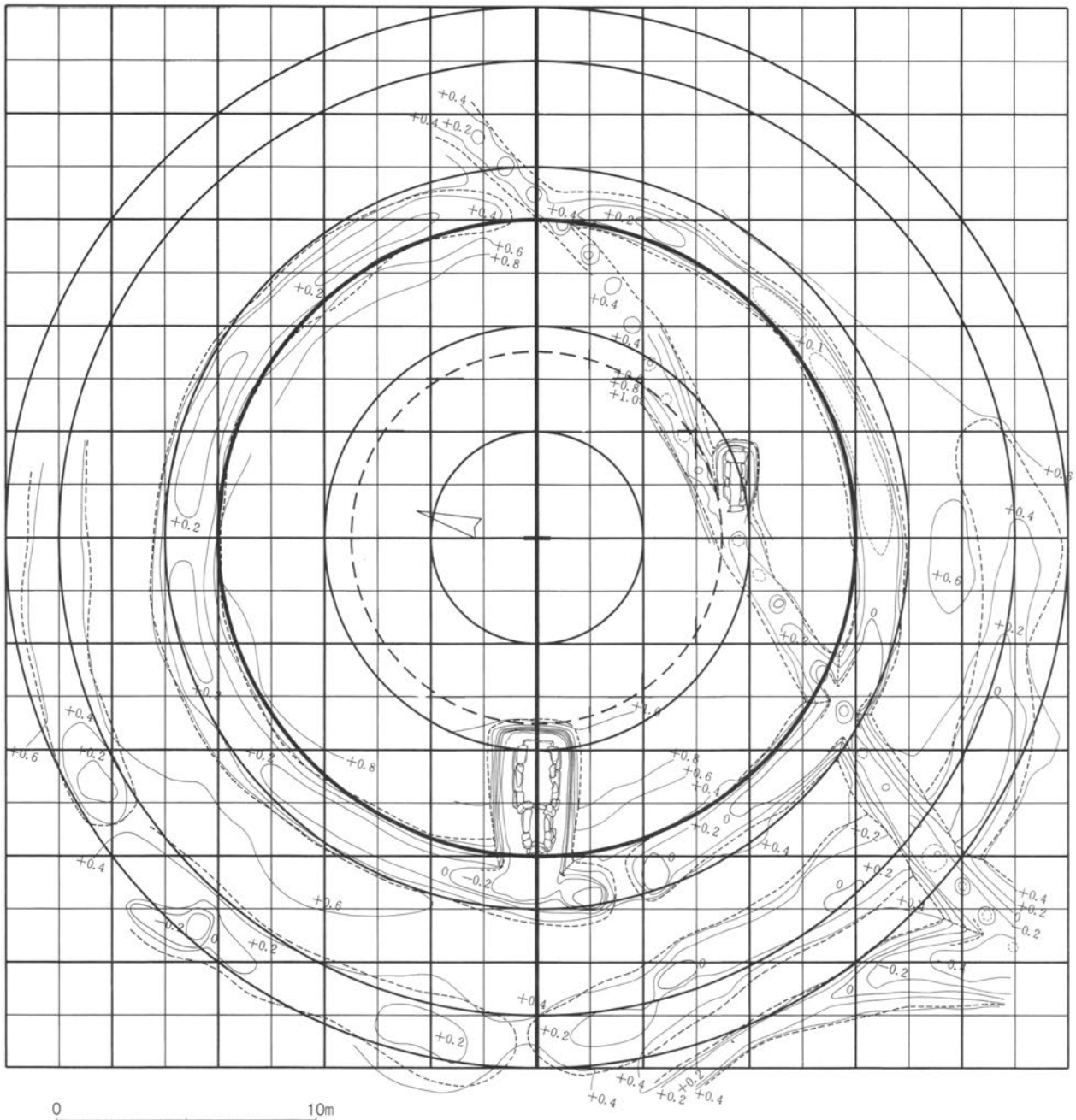
椎名崎A-1号墳は前方後円墳で、後円部は人形塚より半ランク（3歩）大きい径21歩（28.8m）の規格、前方部長は12単位、前幅は24単位、周溝はほぼ一定の幅（4単位）でめぐる墳丘相似形である（第4図）。横穴式石室はくびれ部に近い変則的な位置にあって、そのためか奥壁は8単位目より外側にあるが、墳裾部の地下に置かれ、中央墳丘を避けている点は人形塚その他と変わらない。

人形塚の後円部と、椎名崎A-2号墳、3号墳の主丘部は同一の墳丘規格（直径）をもち、墳丘第2段裾の径、石室の設置位置など共通の企画性を示す。これは決して偶然のことではなく、石室構築材の脆弱性に配慮した上で、古墳尺を用いる24等分値企画法という設計法によって設計、施工された結果である。

地割線の内円に関しては、報告者の見解のとおり墳



第 1 図 人形塚古墳 企画図 (後円部径 18歩・24.7m)



第2図 椎名崎 A-2号墳 企画図(墳丘径18歩・24.7m)
 — 既発表の図に半径7単位の円周(破線)を加筆 —

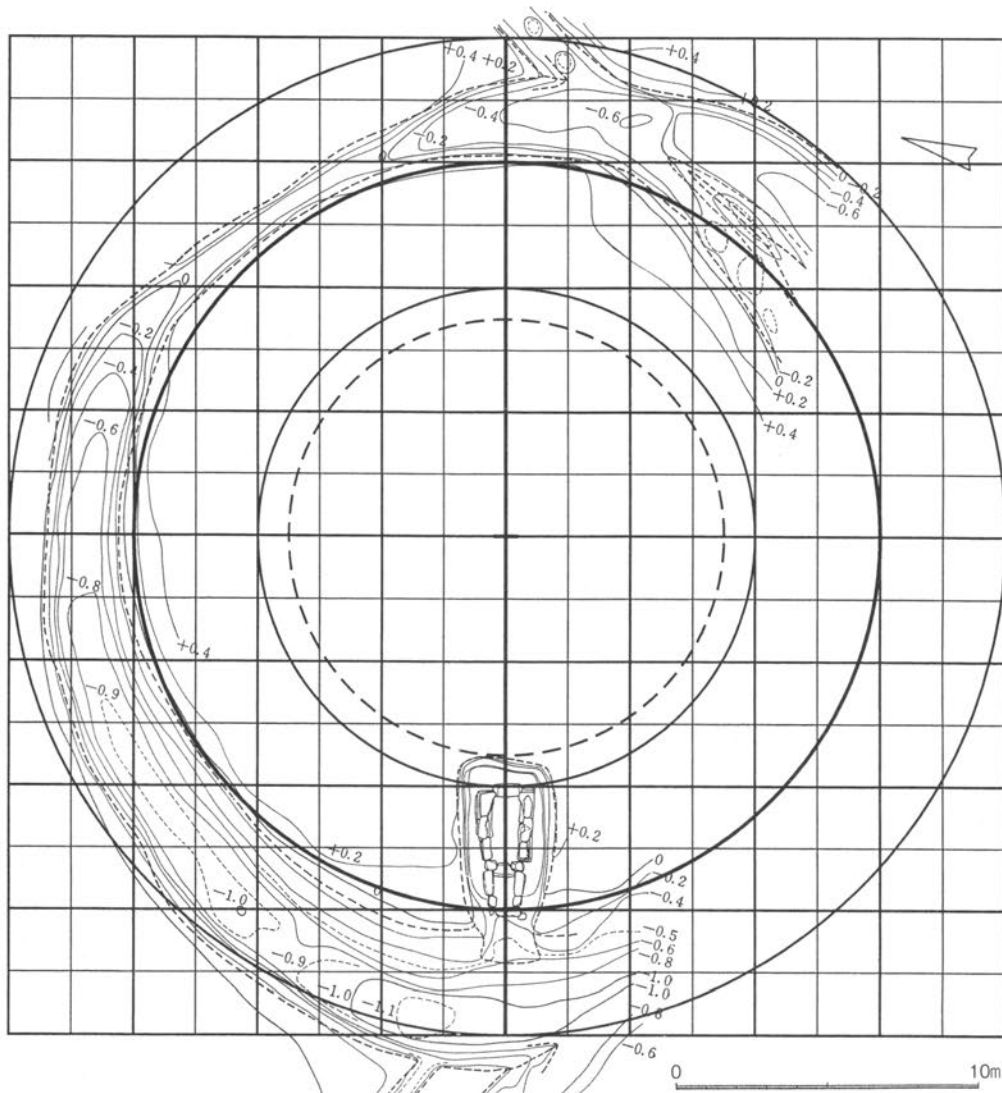
丘第2段の裾線を示し、封土を高く盛り上げる範囲を明示していることはまちがいない。このことは墳丘断面図(第5図)からも見てとることができる。まず中央墳丘を高く盛り上げ、次いで墳丘第1段を横穴式石室設置後に積み上げるという構築手順がとられているのは明らかである。

石室天井石は、奥壁の上に載った部分がわずかに残り、その上面は旧表土面より50cmほど高いから、これを被覆するため墳丘第1段は1単位(1.03m)程度の高さに仕上げられたものと思われる。前方部の横断面

図からも墳丘第1段の高さがこの程度だったことが納得される。第1段の斜面幅を推定する情報はないが、あまり急勾配に仕上げられていなかったとみて2単位の幅と考えておくのが無難であろう。テラスの幅は3単位となり、埴輪群像を置くには十分な幅が確保されているといえよう。

3. 前方部の地割線と当初プラン

前方部地割線のB線とC線が対応するものとする、その中間に古墳中軸線が通ることとなるが、筆者



第3図 椎名崎 A-3号墳 企画図(墳丘径18歩・24.7m)

の推定する中軸線より4度、報告者のものより5度ほど左に振れている。一つの解釈として、当初地割線のように計画したが、右側に斜面が迫っているため不都合が生じ、中軸線を左にずらす修正が図られた可能性は考えられよう(報告書はこれに近い見解をとる)。

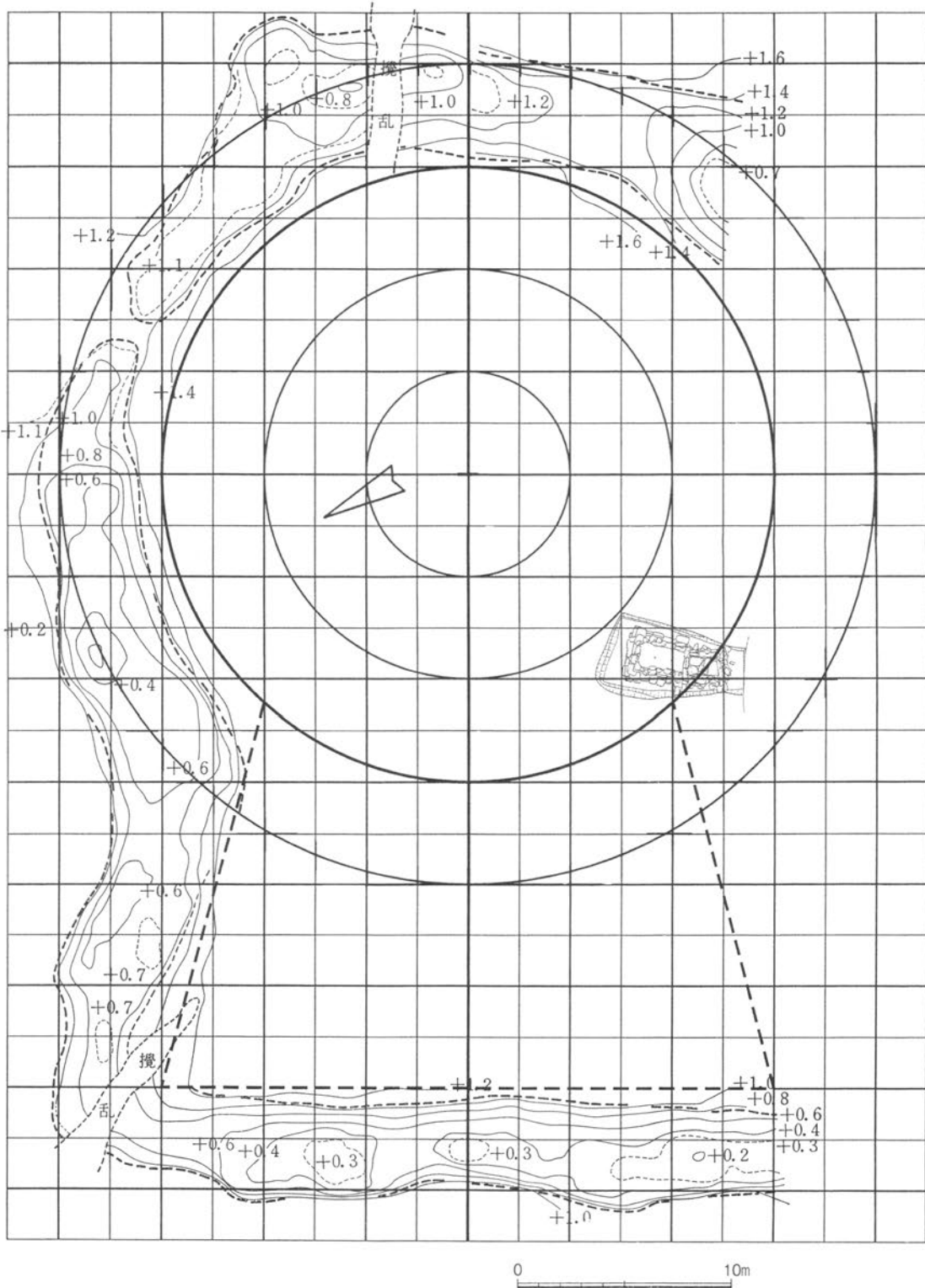
これとは別に、B線に対応する地割線が中軸線の右側では検出できなかった可能性は考えられないだろうか。A線を筆者推定の中軸線を基準に折り返すとC線にほぼ重なるのが根拠となる(第6図)。B線を折り返した線B'を引くと、BB'はくびれ部では中軸線に平行し、前方部先端に向けて徐々に幅を広げる。これは前方後円墳鞍部の肩のラインとしてふさわしいプランといえる。後円部規格の大小にかかわらず、鞍部の両側肩線間の幅が4単位となる前方後円墳は多い。

B、B'が前方部第2段の肩線を示すとすれば、A線とC線は第2段の裾、D線は第1段の肩の線を示す

ということになるが、これでは第2段の斜面幅が狭すぎる点は難点となる。また、第2段肩の線(B、B')は盛土が始まればすぐに埋もれてしまうから、旧表土面に表示しても実用的な意味はない。

後円部の2本の地割線には、盛土と周溝掘削の範囲を示すという実用的な意味があった。前方部でもA線とD線が周溝の掘りこみ開始線、B線とC線が墳丘第2段の裾を示すものなら実用的意味をもつといえるが、それでは前方部の幅が小さすぎ、また中軸線ともブレがあって、できあがった墳丘プランとの齟齬が甚だしい。

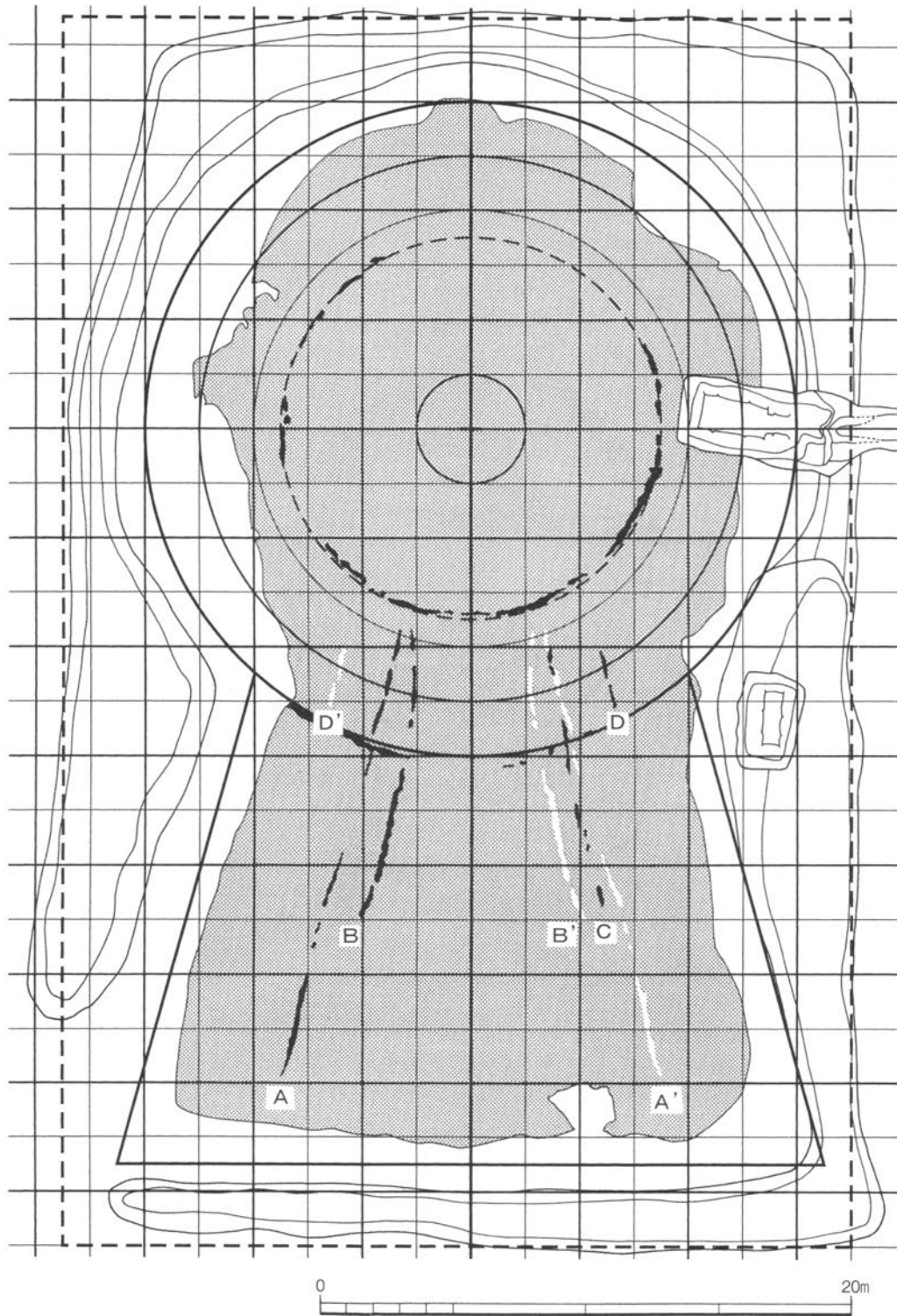
A、B、C線は、後円部の外円と第1段肩線(中心から10単位目の円周線)を大きく越え、内円近くに迫っている。したがって、これらは前方部の墳裾線や第1段肩線を示すものではなく、第2段裾より上の線を示すとみるしかない(D線は10単位目の円周線をわ



第4図 椎名崎 A-1号墳 企画図 (後円部径21步・28.8m)



第5図 人形塚古墳 墳丘断面図 (報告書第114図から改図)



第6図 人形塚古墳 前方部地割線折返し図

ずかに越えるものの最も手前で止まっており、第1段肩線を示すとみる余地を残す)。

墳丘断面図によるかぎり、前方部では墳丘第2段に当たる中央墳丘を先に盛り上げ、その後墳丘第1段をそのまわりに付加する工法はとられていない。逆に第1段を墳丘範囲全体に1単位の高さ(前方部前縁部では1単位半)で盛り上げ、その後に第2段を積み上げ

ている。したがって、第1段肩より上の計画線を地上に表示しても意味はないことになる。

土色の差が見分けにくいといった事情のため、検出されなかった地割線があったことは十分考えられるところといえよう。ただ、いずれにしろ前方部では実用的には必要ない線が引かれていることもまちがいない。なぜそのように実用的に意味のない線が引かれた

のか、断案は示せないが、おそらく設計図をもとに作業工程を検討したり、作業員のための説明用に、墳丘築成上のポイントを示したものと考えるのが今のところ最善の解釈かと思われる。

このように、後円部と異なり地割線から前方部プランを復元することは今のところできないので、発掘状況図に、後円部中心点を基準とする24等分値方格線を重ねた企画図によって前方部墳裾プランを復元した。

前方部長は、報告書のとらえ方では16単位ほどになるが、これでは周溝内壁の下端に達してしまう。後円部直径は旧地表の掘りこみ開始面でおさえられるから、前方部の規模も同じ面でおさえ、前方部長は15単位とみておくのが妥当である。

後円部径24単位を加え、墳長は39単位、歩数では29歩 $1/4 \cdot 40.1\text{m}$ となる。

前方部前幅は、内溝の外壁との関係などから26単位に、くびれ部の幅は、右隅角から前方部側縁の右側斜面部の等高線と平行する直線を引く作図（左側は損壊が著しくこの方法により難い）によって16単位ととらえられる。このようにして推定した側縁線は、地割線と平行しているから、この推定の正しさと、地割線がやはり前方部の墳丘側縁部の構築に深く関わる計画線であったことが理解される。

なお、復元した右隅角は、現状の隅角下端より外に張り出してしまふから、実際には隅角は斜めに面取りされていたことが分かる。葺石の基底石列が全面的に発掘され、隅角が面取りされていることが確認された事例として長野県飯田市久保田1号墳（前方後円墳、前方後円墳集成編年8期か）、大阪府藤井寺市鞍塚古墳（帆立貝古墳、6期）、群馬県高崎市若宮八幡古墳（帆立貝古墳、9期）などがあげられる⁷⁾。実際の施工に際して、斜面が安定するよう隅が丸く仕上げられる場合も多かったことが理解される。

4. 周溝と中堤

前方部長は15単位という奇数単位と確定されたが、これは3単位を1区とする大単位（3単位区）の5区に当たる。この古墳の概略設計にこの大単位が使われた可能性が高いことをうかがわせる。事実、内溝の幅は後円部背後と左、前方部前面で3単位であり、内溝外周の全体規模は 45×30 単位（ 15×10 区）に計画されていた可能性が高い。ただし、墳丘右側だけは斜面が迫っているため幅2単位にせばめられている（したがって実際の内溝外周幅は29単位）。

中堤も全体に幅3単位に設定されていることは明らかで、中堤外周は 51×36 単位（ 17×12 区）に計画されていたとみられるが、これも実際には 51×35 単位の仕上がりとなっている。

外溝の幅は後円部背後ではほぼ3単位だが、左側縁では3～4単位、右側はコーナー部しか確認できないがほぼ4単位、前方部手前では7～8単位ほどにもなり一定しない。

近年、二重周溝を伴う前方後円墳の発掘調査による確認例が増えつつあるが、総じて中堤や外掘の設定は厳密に行われておらず、等分値方格線とよく一致するのはせいぜい内溝外周線までである。それにくらべ人形塚では中堤までかなり厳密に施工されているといえるが、外溝になると掘りこみも浅く、幅も一定しないなど、地形的制約などもあってか、やや杜撰な仕上がりになっていることは否めない。

5. 施工基準面と墳裾面

人形塚で検出された地割線、中でも後円部のそれは筆者の企画論、尺度論の正しさを立証する資料となった。

後円部の地割線外円は周溝の掘りこみ線を示すが、その直径は古墳尺の径18歩（24.7m）に正確に一致していた。このことは、掘りこまれた周溝内壁の下端線によって墳丘規模が示される例ばかりでなく、掘りこみ開始面、すなわち施工基準面で墳丘規模をとらえるべき類例があることを教えてくれる。

筆者は、墳丘規模が示される面を「墳裾面」と呼んでいるが、人形塚は施工基準面と墳裾面が同一レベルになる例であった。これに対し、栃木県の基壇古墳などは、施工基準面は旧地表面にありながら、墳裾面は掘りこまれた周溝の内壁下端線にある。施工基準面と墳裾面のレベルを異にする例である⁸⁾。

墳丘規模をどの面で計測すべきかは大きな問題であり、そのとらえ方を誤れば、当初プランの把握や使用尺度の推定にも成果は期し難い。墳裾に葺石の基底石があれば、そこがほぼまちがいない墳裾面である。問題は関東地方南部のように葺石をもたない古墳で、この場合は等分値円周線と墳丘各段の裾や肩の線、主体部、埴輪列などとの一致状況を確認する作図作業によって、慎重に判定しなければならない。

人形塚では、後円部の2条の地割線および横穴式石室と等分値円周線との一致から、周溝掘りこみ開始面で墳丘規模をとらえるべきことが確認され、後円部

規格が確定された。また、近傍の椎名崎A-2号墳では二重の周溝と横穴式石室との一致から、A-3号墳でも横穴式石室との一致から、同様の事実が確認された。

『前方後円墳集成』⁹⁾では墳丘規模は周溝下端で計測すべきとしているが、一律的なそのようなとらえ方では、築造時に意図された墳丘規模、さらには墳丘の平面プランを正しく把握できない場合があることを知るべきであろう。

6. 墳丘築成の手順

後円部の地割線内円は、墳丘第2段の盛土範囲を示すものであった。墳丘断面図からも、内円の内側に急傾斜の円丘を盛土し、その後その周囲に第1段の封土を付加していることが明らかに見てとれる（以下、この工法を、既存の堤防を補強するため側面を盛り足す「腹付」という伝統的工法の用語を借りて「腹付工法」と呼ぶ）。

腹付工法は大阪府羽曳野市蔵塚古墳（9期か）でも確認されている¹⁰⁾。この古墳では「土囊列」が検出され、その観察から盛土作業の手順が明らかにされた。まず後円部「内円丘」が第一に築成され、次いで同「外円丘」→前方部「内方丘」→同「外方丘」の順で積み上げられている（第7図）。

一方、一定の厚さの土壇を積層模型のように何段も積み上げていく工法（土壇積み上げ工法）も知られ、大阪府堺市百舌鳥大塚山古墳（5期）¹¹⁾のような大王墳に準ずる大古墳をはじめとして、千葉県でも市原市新皇塚古墳や大厩浅間様古墳（共に4期）など広く確

認され、類例はこちらの方が多い¹²⁾。

蔵塚報告書（72～73頁）では鳥根県松江市古曾志大谷1号墳（前方後方墳、8期）を腹付工法がとられた類例としてあげているが、後方部の築造が先行し、そのあとに前方部が付加されているのは確かだとしても、後方部自体では中央方丘の築成を先行させるような手順は認められない（基本的に墳丘第1段は地山削り出しによって形成されている）。

墳丘の断ち割り調査によって、後円部の築成が先に行われ、そのあとに前方部が付加されていることが確認された事例はそれほど多くはない。静岡県磐田市赤門上古墳（3期）、名古屋市大須二子山古墳（8期）、鳥根県松江市岡田山1号墳（10期）、同出雲市大念寺古墳（10期）など¹³⁾のほか、筆者自身も椎名崎A-1号墳で同様の状況を確認している。

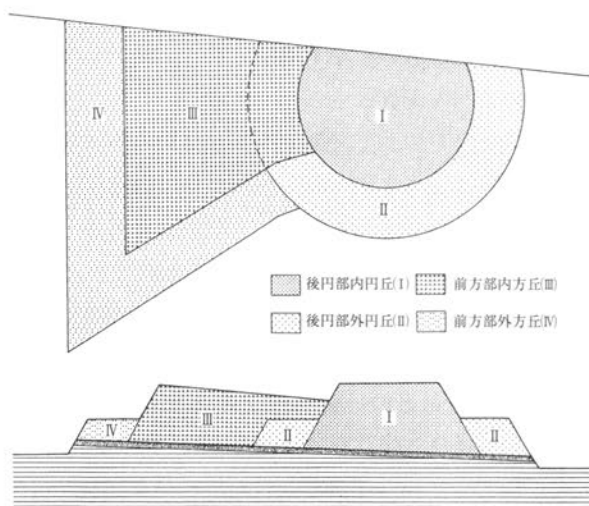
しかし、後円部自体の築成手順が、土壇積み上げ工法によらず、中央円丘の築成を先行させる腹付工法による事例はきわめてまれである。その確実な類例として人形塚を追加できた意義は大きい。

蔵塚は6世紀中葉から後葉、人形塚は6世紀末の築造とみられるから、古墳時代後期になってこのような工法が一部で採用されたことは確かだとしても、どの程度普及したものか今のところわからない。

封土内に横穴式石室を築く古墳では、側石を1段積み上げるごとに、石が外側へ転落するのを防ぐため、裏込めとして固く締め固められた土や粘土が石の高さまで盛られる（石室内側への転落は木の枠型によって防がれる）¹⁴⁾。結果として石室が完成するころには、そのまわりに土饅頭のような甲高の盛土ができあがることになる。そのあとに土饅頭を被覆する盛土が行われ、墳丘の全体的形状が調整される。墳丘断面からこのような構築手順が観察される事例は各地で知られるので、腹付工法は横穴式石室の導入に伴って成立した新工法の可能性が考えられる。

仮に、6世紀代にこうした工法がある程度普及していたとすれば、人形塚もこうした新技術を導入して築造された可能性は考えられる。ただし、この古墳の石室は封土（中央墳丘）内には築かれず、地山を掘りこんだ地下に構築されていた。

人形塚の場合、脆弱な石材を使って横穴式石室を構築しなければならないという事情があり、石室の周囲で大きな圧力と振動が生じる盛土を行うことはできない。封土積み上げの過程で、締め固めの際の圧力などがかかる中央墳丘を先に築成しておき、その後石室



第7図 大阪府蔵塚古墳の墳丘構造模式図
（報告書から転載）

を地下に構築するという合理的な手順がとられている。石室を地下に構築するのは、石材の脆弱性に配慮してこの地で創案された地域色といえよう。ただ、人形塚のほか椎名崎A-2号墳、3号墳でも石室構築に同一の企画性が確認されるから、単発的な築造技法ではなく、一定の地域的広がりをもっていた可能性は十分考えられる。殿塚古墳との長方形周溝や同工人物埴輪の共有などに着目すれば、山武地域なども含む広域に及ぶ技法であった可能性も高いと思われる。

中央墳丘の積土を先行する腹付工法も、脆弱な石室に配慮してこの地で考え出されたものなのか、それとも蔵塚に見られたような畿内の技法が導入されたものか、その評価によって人形塚における古墳築造技術と技術者に関する評価が分かれることになるが、その判定は今後の課題としたい。

いずれにしても、人形塚古墳などの設計から施工管理までをになった、ある種の専門的造墓技術者の存在を想定して誤りないものとする。古墳尺による一定の主丘部規格（直径）が採用され、24等分値企画法によって築造されていることからそれはいえる。後円部の築成工法が中央の新技法を導入したものだったとすれば、その古墳1基かぎりの施工者による仕事とは到底考えがたいことになる。同様に、墳形や主丘部規格の決定も、造墓主体者の任意にまかされたものではなく、6世紀末になってもなお、倭王権による造墓管理政策の統制下に置かれていたこともまた認めなければならないものとする。

おわりに

形象埴輪群像が目される人形塚古墳であるが、その優れた報告書に触発されて、筆者の関心ある分野についてのみ卑見を述べた。ほかに長方形周溝をもつ前方後円墳の企画性や、いわゆる変則的古墳の企画性などについても考えるところがあるが、紙幅の都合もあり別の機会を待ちたいと思う。

地割線の検出は確かに大きな成果で、これによって上に述べたように古墳の設計、施工上の貴重な情報を得ることができた。内円、外円は同心円をなすので、その中心点に杭などを打ち、縄を張って円周が描かれたと思われるが、その痕跡が確認されなかったのはいささか残念であった。旧表土面に痕跡が残らない程度の細い棒で間に合わされたのだろうか。そのほか墳丘中軸線に縄を張った痕跡や、斜面角度を規定する「丁張り」を設置した痕跡なども検出されなかったが、な

いものねだりというべきだろう。

いずれにしても、本稿のような検討が可能になったのも、旧表土面での地割線を見逃さなかった調査担当者の功績に負うものであり、その慧眼に感服するしかない。

それにしても筆者が椎名崎古墳群の調査を担当した昭和49年当時、墳丘の全面除去など考えられもしなかったことを思えば、10年ほどの間に文化財保護側の意向が開発者にも理解され、十分な調査ができる体制が整備されたことを知ることができる。直接の調査担当者のみならず、埋蔵文化財保護体制の強化に尽力されたすべての関係者に感謝しなければならない。

注

- 1) 白井ほか『千葉東南部ニュータウン35—千葉市椎名崎古墳群B支群一』(助千葉県教育振興財団, 2006年)
- 2) 沼澤『千葉東南部ニュータウン1—椎名崎古墳群(第1次)—』(助千葉県都市公社, 1975年)
- 3) 沼澤『円墳築造の企画性』『研究連絡誌』第56号, (助千葉県文化財センター, 2000年)
- 4) 市毛勲『前方後円墳における長方形周溝について』『古代学研究』第71号, 1974年
- 5) 笹生衛『椎名崎古墳群・人形塚古墳発掘調査概要—人形塚古墳旧地表面上の地割線について—』『研究連絡誌』第19号, 1987年
- 6) 筆者の築造企画論の全容については沼澤『前方後円墳と帆立貝古墳』(雄山閣, 2006年)にまとめたので参照されたい。
- 7) 澁谷恵美子『久保田遺跡—久保田1号古墳(正清寺古墳) 間魔王塚古墳—その2 古墳編一』飯田市教育委員会, 2003年; 田島桂男『八幡原古墳』高崎市教育委員会, 1974年; 三木弘『土師の里遺跡—土師氏の墓域と集落の調査—』大阪府教育委員会, 1999年
- 8) 沼澤『古墳築造企画の普遍性と地域色—栃木県南部における基壇を有するとされる古墳をめぐって—』『古代』第114号, 2004年
- 9) 『前方後円墳集成』各巻, 第2章「マニュアル作成の過程および凡例」山川出版社, 1991~2000年
- 10) 江浦洋ほか『蔵塚古墳—南阪奈道路建設に伴う後期前方後円墳の発掘調査—』(助大阪府文化財調査研究センター, 1998年)
- 11) 樋口吉文『百舌鳥大塚山古墳発掘調査報告—前方部北西コーナーの調査—』『堺市文化財調査報告』第40集, 堺市教育委員会, 1989年
- 12) 沼澤『墳丘断面から見た古墳の築造企画』『研究連絡誌』第60号, 2001年
- 13) 沼澤『前方後円墳の墳丘規格に関する研究』『考古学雑誌』第89巻第2~4号, 2005年
- 14) 沼澤『古墳の築造企画と横穴式石室』『考古学雑誌』第87巻第1, 2号, 2003年